

村上・北大教授 リウマチ医学賞 慢性炎症のメカニズム解明



村上正晃教授

北大遺伝子病制御研究所長の村上正晃教授(59)＝神経免疫学＝が、日本のリウマチ研究の発展や進歩に大きく寄与する独創的な研究に贈られる、日本リウマチ財団(東京)の2023年度ノバルティス・リウマチ医学賞を受賞した。

受賞した研究は「IL-6(インターロイキン・シックス)アンブとゲートウェイ反射によるリウマチ性疾患の制御機構の解明」。

リウマチをはじめとする慢性炎症性疾

患の分子メカニズムの解明に取り組んでいる

村上教授は、免疫細胞を集めて局所の炎症を増幅させ慢性炎症を起こす仕組み「IL-6アンブ」と、神経回路の活性化によってIL-6アンブを発動させて疾患を発症させる仕組み「ゲートウェイ反射」という二つの機構をそれぞれ2008年と12年に発見。この二つがリウマチ性疾患に深く関わっていることを明らかにした。

道内からの同賞受賞は、1993年の小池隆夫・北大教授(当時、現・北大名誉教授、北海道内科リウマチ科病院＝札幌＝最高顧問)以来30年ぶり。

10日に東京で開かれた授賞式で、村上教授は「独自の研究でリウマチ性疾患の解明に貢献したいと思い、ここまで来た。素晴らしい歴史ある賞をいただき、感謝とともに感動している」と喜びを語った。

ほかに授賞式では、斗南病院(札幌)の薬剤師、大音師澄子さんと、札幌山の上病院(同)の作業療法士、清水兼悦さんの2人に、リウマチ性疾患の医療やケアに大きく貢献した専門職をたたえる、23年度日本リウマチ財団リウマチ専門職表彰が贈られた。(編集委員 岩本進)